野に仏・里に仏

大谷　眞

第一回目の旅・その一
落ちこぼれカメラマンが白衣を着るまで

1994年4月3日　晴

デッキに出て手すりにもたれながら海を見た。さらさらの春の日差しが暖かく溢れ、スパークリングワインのように波間に弾けている。潮風は船首の方向から絶え間なく吹き付け、ともすると意識ごと彼方に吹き飛ばされそうになる。

午前11時25分、和歌山港を出港した「南海フェリー」は、今、四国は徳島市の南、小松島港をめざし、紀伊水道を西に進んでいる。予定ではちょうど2時間の船旅だ。

さて、と心はまた振り出しに戻る。そうだ、確か今朝は4時半に起きるはずだった。それが気がついたら7時半！お遍路の初日から3時間も寝過ごしてしまった。

あわてて朝食をかっこみ、ほうほうの態で家を出た。そうでなくてもこのところの不景気風、まともにくらって仕事にも縁遠い身の上、あの馬鹿でかいザックなら「夜逃げ」ならぬ「朝逃げ」とも取られかねなかっただろう。

自宅から和歌山港まで2時間、ぎりぎりで船一つさらに乗り遅れ、ようやく今、この船に身を預けている。大幅に手はずが狂い、この先どこまで予定を消化できるやら、ふと不安も頭をもたげるが、考えてももう仕方はあるまい。そもそも、このお遍路の計画も確固たる見通しがあったわけでもない――。

この歳になって、思いついたら、すぐになんでもやってみる腰の軽さは良しとしても、後先考えない行動は、少し投げやりな感もする。3年前、広告写真の世界を飛び出して以来、このノーテンキさはいまだに治らない。しかしながら、先の見えない時代だからこそ、今やりたいことをやらねば一生不覚をとるやかも知れず、まぁなるようになるさ、と腹をくくって生きている。子供のいない夫婦だからこそ出来ること、と嫌みを言う知人もいる。

「お遍路、やってみようかなぁって、考えてるんやけど・・・。」

一年ぶりに会った元仕事仲間のスタイリストに、事前にこっそり打ち明けてみた。挨拶がわりに近況を問われ、この返答に彼女は呆れた顔をした。

「・・・あのねえ、それって、ちょっと暗いんちがう？」

首でもくくりたいカメラマン仲間も多いこの不景気、確かに時期的に不適切な答えだったかも知れない。

「いや、その、いろいろあって・・・。」

わざとため息をついたりして、ちょっと深刻

ぶって見せるが、彼女は話に乗ってこない。

「その、なんていうか、靴だって買って、今、履きならしてるとこなんやけど・・・。」

彼女は黙ってしまう。顔には「我関知せず」と書いてあった。

呆れるのは分かる。自分でも呆れている。この10年来、ヨーロッパを機会があれば歩いてきた。仕事に追われ、疲れ切って、ぽっかり空いた心の隙間に何かを詰め込もうと、日本を飛び出し、あっちふらふら、こっちふらふら、旅を続けてきた。それでも結局自分の身の置き所も定まらぬまま、この不景気風に、かの地への道は非情にも閉ざされてしまった。

放浪癖のついた「落ちこぼれ」は考えた。今の日本にも、じっくりと「旅」を楽しめるほどの場所は残されているのだろうか？スーパーのパックに入れられた野菜のような「旅」ではなく、まだ泥のついたままの、抜きたての大根のような「旅」が・・・。

ヨーロッパを歩いていると、一日中、お日様の下にいることになる。日本では仕事に追われて見えなかったものが、じっくり向き合うと見えてくる。暑さや寒さ、荷物の重さや言葉の壁に、体も心も痛め付けられたあげく、やっとの思いで転がり込んだ小さな居場所で、ほっと息をつくと、突然、なにもかもが、眩いばかりに輝いて見える瞬間があった。

――そうか、つまり旅は巡礼のようなものかも知れない。

と、その時直感した。

太陽の下で体を動かし、自然とともに生き、ありがたく食べて、安らかに眠る、その日々こそ、我々の中に脈々と生きてきた人間本来のリズムなのだ。それらの記憶は、野の花や空の鳥と等しく、記録に残された歴史より、はるかに長い時を経て刻まれてきた。地球上に生きる一つの生き物としての、いわば本当の歴史だと言える。それに気づけば、人もまた、一羽の鳥、一本の草にもなれる・・・。

日本に帰国し、鬱々と暮らす日々に、近在の図書館で一冊の本に出会った。手束妙絹著「お遍路でめぐりあった人びと」である。彼女の透き通るような文体と、優しさに溢れた語り口は、従来の自分の中にあった「お遍路」への認識を変えた。十五回もの徒歩遍路の末、縁あって四国北条市に近い番外霊場「鎌大師堂」に庵主として迎えられ、この旅での日々の思い出を、その著書の中でこまやかに描かれていた。これをきっかけに、お遍路に関するいろいろな資料を集めてみた。読めば読むほど浮世ばなれした世界だった。

「お遍路」には、食い詰めて故郷を捨てた人々や、不治の病と忌み嫌われた人たちが、行く当てもなくこの四国へ流れ、死ぬまで歩き続けたという暗い過去もある。これらの人々を受け入れた四国の人の暖かさは、かっての若き日に四国の野山を修行の場として闊歩した空海こと、弘法大師を、今も「お大師さん」と厚く信仰する心に培われてきたものだ。

現在では、そのお遍路さんのほとんどが、車かバスで回る。「観光八分、信仰二分」と揶揄されるように、意外に彼らの表情は明るく、屈託が無い。しかし、こんな時代でも、今だに完全徒歩にこだわるお遍路さんたちがいる。その数は年間千人とも二百人とも定かでは無い

今の生活ペースにあわせて造られた現代の道を歩むことは、非合理的であり、苦痛以外の何ものでもない。全行程、おおよそ千二百キロを、徒歩で歩けば二カ月近くはかかると言われている。この苦行は並大抵ではなかろう。まさに時代錯誤そのもののようにも思える。それでも体験し、「結願」した人達から聞かされる言葉は、ただただ感謝の涙、だという。もしかして、ここにこそ、私の求めていた「日本の旅」の原点を見つけられるかもしれない、そう思った。この想いが私をお遍路にかきたてるきっかけとなった。

今回のお遍路は、とりあえず一週間を予定していた。一度に二ヶ月も家を空けることは、到底無理だった。春に見つけた写真学校での講師の仕事は、定期的にスケジュールを入れられている。幸い「区切り打ち」と言って、行程をいくつかに分割してお参りする方法もあると聞く。現代人のように、社会的に時間のとれない人の多くは、この方法をとらざるを得ない。これなら私にも可能と思えた。

ところで、日本の中では、私は歩いて1週間す

ら旅をした経験がない。当然荷物をどうしたら良いか考えた。私の頭にあったのは、かってのバックパッカーたちだった。フレーム入りのザックに、寝袋とわずかの生活用品を詰め、自由にふわふわ旅を続ける若者達が世界にあふれていた時代があった。ヒッピーやマリファナが、自由への象徴としてとらえられたあの時代も、やがて性急すぎる時代の波に洗脳され、権力の構造のひだの中に埋もれて行った。そうか、やるならあの旅がいい、そう思った。

道中には「遍路転がし」と異名をとる難所も数多くあると聞く。そこでやっぱりザックを考えた。

宿泊に関しては野宿も覚悟したが、山の中ならともかく、市街地では難しいだろう。だから基本的に民宿を利用しよう。先人たちの体験記の中に度々登場する「遍路宿」という安宿は、今でもあるのかどうか分からない。寝袋はいざという時に備えて、ザックの一番下に詰め込んだ。

あと、携帯の内容を考える。着替えと薄手のセーター。コッヘルと小さな固形燃料。ラーメン等のインスタント食品。それとコーヒー。行動食としてのチョコレートと干しぶどう。やっぱり、カメラとレンズは職業柄離せない。もちろんフィルムも。これに資料と地図に筆記要具、ポンチョと懐中電灯、魔法瓶に洗面用品、薬とラジオ、ｅｔｃ、ｅｔｃ・・・。

気が付くと、ザックは鉛のように重くなっていた。試しにかつぐとずっしりと足にくる。あわて

て料理秤を持て来て、グラム単位で減量した。資料は必要な所のみコピー。ラジオは中止。シェーバーの替わりに安全カミソリ。着替えも2セットのみに減らす。自炊道具もあきらめよう・・・。

しかし結局考えて減らしたつもりでも総重量は12キロを越えてしまった。しかしこれ以上減らして、ただ歩くだけの旅なら味気無い、と思い直し、このあたりで手を打つことにした。

次の問題は足。一日どのくらい歩けるか、まるで予測がつかない。荷物の重さを考えると、やわな靴は足の関節を痛める。そこで、山歩きもあるからと、登山用品店でトレッキングシューズを買った。ゴアテックスブーティ入りで雨対策も考慮した。

出発の前夜、これらを装備して家の中を歩いてみた。意外に肩に掛かる重さはさほどでもなかったが、やはり足への不安は残った。

今回頭を痛めた一つに、地図の問題もあった。この時はまだ、お遍路用の地図などあるとは知らず、道路地図で10万分の一の四国地図を買い求め、必要な所だけコピーしていた。しかし何しろ車のための道、歩くためには作られてない。今回一番の不安材料だった十一番藤井寺から十二番焼山寺までの山道も、当然この地図には記載がない。せめてもの救いとして地図上に記載されている寺の位置を、とりあえず目指して歩くしか無さそうだ。

寝床についてもまだ頭はさえて眠れない。不安と期待が頭の中で堂々めぐりをくり返した。そのあげくが3時間の寝坊、というわけだ——。

船は1時25分、小松島港に接岸した。JR南小松島駅まで連絡バスに乗り、到着後、すぐにやって来た徳島行きの列車にあわてて飛び乗った。徳島で板野行きの列車を30分ほど待ち、これに乗って「ばんどう」駅で降りた。時刻は既に3時を回っていた。

「ばんどう」駅から、遠い記憶の中の風景を感じさせる古い町並みをしばらく歩くと、右手に折れたところに大きな石柱が現れた。「四国第一番」とある。この路地の突き当たりには第一番霊場霊山寺の山門がうかがえた。

いよいよやって来た、と妙にはやる気持ちを押さえながら、とりあえず予約しておいた民宿「かどや」に荷物を預け、また宿を出た。霊山寺に行く前に済ませておきたい事があった。お遍路の衣装をどこかで手に入れること、それから、気持ちを新たにするためにも、髪を短くしたい、という二点だった。せっかくお遍路をするなら、きちんと形を守りたい、本当に信心からお参りされる方たちの中にあって、せめて礼を尽くさねば、との思いだった。

まず頭から片付けることにした。宿に入る手前、路地の角に散髪屋があったのを思い出し、店の前に来て中をうかがうが人影がない。それでも昔ながらの店構えに心引かれ、待つつもりでガラス戸を開けた。と、毛布をかぶって隅のソファに寝ていた

老人があわてて跳び起きた。こちらも驚いた。
「あ・・・、あの、今、いいですか？」
「どうぞ、どうぞ。」
　老人は恐縮しながら椅子を勧めてくれた。それから、後ろで束ねようと伸ばし放題だった私の頭に、老人は面食らったようだ。
「・・・どのぐらいにしておきましょう？」
「実は思い切り、ざっくりと短くしたいのですけど・・・。ええっと、じゃぁ、スポーツ刈りにしてください。」
「どの程度に？」
「あまりの変わりように、びっくりされない程度にしておいてください。」
と訳の分からない事を言う。老人は事情を察したのか、呆れたのか、
「はぁ。」
とだけ言って、後は何も語らず、ジョキジョキと威勢良くハサミを使い出した。
　こんなふうに「発心」し、気持ちを新たに頭を丸めようとやって来る客には慣れているのかどうか、心得たように黙々と仕上げてくれた。終わってからメガネをかけると、鏡の中に少し「おっちゃん」になった私が神妙にすましていた。
　今度はお遍路の衣装と用品である。これもどこで買い求めたら良いのか分からない。とりあえず、お寺に向かって歩いていくと、霊山寺門前左手に土産物屋があった。その中に「お遍路用品一式」とあり、店先にはお遍路姿のマネキンが立っていた。さっそく店に入る。
　店内では、がっちりとした初老の男性が客の対応に追われていた。キョロ

キョロしていると声がかかった。
「実はお遍路をしてみたいと考えているのですが・・・、何をそろえれば良いのか、どのくらい予算がかかるのか、教えてもらえませんか？」
「そうですね、一式そろえて、一万円程度ですか・・・。」
「何をそろえればいいんですか」
「まず白衣。輪袈裟にお杖。納札（おさめふだ）とお線香にロウソク。それから納経帳と数珠、経本。それと、これらを入れておくさんや袋、ずだ袋ですね。帽子か菅笠は必ず要りますよ。」
と次々に渡される。
結局、数珠は、以前中国のお土産にいただいたものを持参していたのでパス。また菅笠も、いかにも時代錯誤のように感じ、ふだん使ってる帽子で済ます事にした。（しかし菅笠は、後々何度も後悔するはめになった。）以上、しめて九千百五十円也。
ズボンと帽子をのぞいては、にわか遍路の姿に変身し、霊山寺の山門をくぐる。ところが「遍路用品は納経所にて販売しています。」と張り紙があった。まさかお寺の中で売っているとは知らなかった。
お参りの手順は、先程の店で主人に教えられた方法で済ませた。手を洗い、口をすすぎ、お寺の鐘をついてから、まずは本堂のご本尊にお参りする。ここでお線香とロウソクを上げ、納札とお賽銭を収め、お経を唱える。この後大師堂でも同じ手順でお参りを済ませる。
「お経は、まずは『般若心経』が唱えられるよう練習してみてください。」
と先ほどの店の主人のアドバイス通り、経本を見ながら読んでみた。ところが、これが一向に何のことやら、どこで息を継ぐやら、しどろもどろになってしまった。で、あえなくギブアップ、以下省略させてもらうことにした。とりあえず、家族、知人、友人の亡くなられた人たちのご冥福と、自分の将来への加護をお願いした。
霊山寺は本堂を入って右手に納経所があった。先程買った納経帳を差し出すと、三つの朱印を押した後、墨痕鮮やかに達筆でしたためてくれた。何が書いてあるのかこれも判読不能。（後でこれらは、受納経、ご本尊の名前、お寺の名前、のセットだと分かった。）これに「お姿」と称されるご本尊が描かれた小さな絵札を戴いた。しめて三百円也。
あたふたとお参りして、何の感慨もない。お寺そのものも、どこにでもある町のお寺という風情で、少々期待外れの感もあった。遍路姿のお参り客も他には見かけず、もしかして、ものすごく場違いな事をしてるのでは、とふと思った。

霊山寺から1キロほど西に、二番極楽寺がある。そろそろ日が傾き始めているが、とりあえず本日は三番金泉寺まで歩き、ここからＪＲで「ばんどう」まで戻り、今日の宿に泊まる予定にしていた。道は広い車道を歩くことになった。道行く車や人の目を意識すると、自分のいで立ちが、ますます場違いに思える。おまけにこの杖の扱いはどうす

ればよいのだろう？　杖などなくても歩けるし、かといって肩にかつぐ訳にもいくまい。

15分足らずで二番極楽寺に着き、同じくお参りを済ませた。既に境内には人影がない。ここから金泉寺への標識を見つけ、これに沿って畑の道を歩き、人家の間を抜け、30分程で三番金泉寺へ着いた。

既に6時を回っていて、ここも誰もいない。お参りを済ませて納経所をたずねるが、なぜか閉まっていた。御用の方は、とメモのあるボタンを押しても、やはり誰も出て来ない。おかしいなと思いつつ待っていると、横手の縁側のガラス越しに、子供が顔をのぞかせた。また引っ込むと、しばらくして住職らしき人が、やっと受付の小窓を開けてくれた。

「何かごようですか？」

「納経をお願いしたいのですが・・・。」

相手のとがめるようなそぶりに少しためらって答える。

「納経所は5時までですよ。」

と彼は張り紙を指さした。確かに「納経時間・7時より5時まで」とある。

「済みません。何も知らずに歩いてきましたので。」

「お歩きですか・・。じゃ仕方ないですね。」

恐縮する私を見てか、いくぶん彼の表情も和らぎ、納経帳を受け取ってくれた。

「今日はどちらにお泊まりで？」

「一番さんの近くにとっていますが・・・。」

「それじゃ、今から急いで駅に向かわれたら、ちょうど徳島行きの電車にまにあいますから。」

お礼もそこそこに、あわてて教えられた「板野駅」へ向かう。駅に着くと、すぐに列車がすべり込んできた。しかし、お寺にも門限があるとは知らなかった。でも考えてみたら、四六時中、納経を受け付けていたらきりはないだろう。一駅乗って「ばんどう」へ降り立ち、かろうじて期待と不安の第一日目を終了した。

（この日やっぱりあわてて家を出たせいか、洗面用具一式とタオル、目覚まし時計も忘れている事に気がついた。やれやれ、先が思いやられる・・・。）